

雑誌『推理』と松本清張

李彦樺

一、はじめに

雑誌『推理』とは、かつて台湾で発行されていた、推理小説を専門とする雑誌である。1984年に創刊号が発行され、2008年の282号で休刊になったが、終止符が打たれるまでの約20年間は、台湾での唯一の推理小説専門誌とされる⁽¹⁾。この雑誌『推理』は、台湾の推理小説界において知名度が高く、24年もの長い間に日本や欧米を問わず様々な外国の推理作品を台湾人に紹介し、また台湾の重要な推理小説作家を何人も生み出した⁽²⁾。休刊になるまでは台湾の推理小説界で一番重要な雑誌だったといっても過言ではない。

雑誌『推理』の創刊者林佛児は、台湾の著名な文化人である。彼は出版社の経営者であり、詩人であり、また推理小説の作家でもある。彼は、台湾の推理小説界の一番重要な先駆者とも言える。何故なら、林氏は第二次世界大戦後、初めて中国語を使って長編推理小説を創作した台湾人作家である⁽³⁾。更に、林氏は出版社と雑誌『推理』を通して、多くの外国の推理作品の中国語版を生み出した。周浩正に「台湾推理小説界の第一人者」と称賛される⁽⁴⁾ほど、林佛児は台湾推理小説界には大きな影響力を持っていた。

この林佛児は、日本の社会派推理作家松本清張の大ファンである。林氏は、雑誌『推理』に松本清張の作品を掲載させ、また70年代前期から、自分が経営する出版社に松本清張の推理小説を翻訳・出版させた。松本清張の推理小説は70年代後期から80年代にかけて、台湾で大きなブームになったが、当時の台湾の推理小説界はまだ空白に近い状態だったため、松本清張の作品によって、台湾人読者は推理小説の面白さを知ったと言っても過言ではない⁽⁵⁾。今でも松本清張の作品は台湾においての人气が高く、推理小説に少しでも興味を持つ台湾人なら、松本清張を知らない人はいないと言えるだろう。

本稿は、雑誌『推理』、林佛児、そして松本清張の三者の関連性を各資料の分析により明らかにすることを試みたい。

(2)

以下、本論に入る。

二、林佛児と松本清張

(一) 林佛児について

まずは、林佛児の生い立ちと経歴を簡単に説明したい。林氏は、1941年生まれ、出身地は台湾の台南市。1960年に初めての詩集『芒果園』⁽⁶⁾を発表し、その後、散文集『南方的菓樹園』⁽⁷⁾『脚印』⁽⁸⁾『風箏與童年』⁽⁹⁾を続々と発表。1980年に小説『北回歸線』⁽¹⁰⁾を発表するが、この作品は推理小説ではない。1984年に『島嶼謀殺案』⁽¹¹⁾を発表する。この作品こそが初めての台湾人による長編推理小説になる。そして、1987年に第二作目の長編推理小説『美人捲珠簾』⁽¹²⁾を発表する。この『美人捲珠簾』は、後に中国の第二回「最佳偵探長篇小説」を受賞することになる。

詩人や作家としての経歴以外にも、林佛児は出版社経営者と雑誌編集者としての経歴を持つ。1968年に、林佛児は林白出版社を立ち上げ、1969年に、松本清張の作品「ゼロの焦点」の中国語版を出版させた。その後、林佛児は続々と松本清張を筆頭とする日本推理作家の小説を出版社に翻訳・出版させた。70年代後期から台湾では松本清張ブームが起こったが、林佛児が経営する林白出版社はまさにこの現象に火をつけた最も重要な出版社の一つと言える。そして、1984年に林氏は推理小説を専門とする雑誌『推理』を創刊した。この雑誌は2008年の休刊号まで、長年台湾で推理小説を広める努力を続けてきた。

(二) 松本清張への崇拜

初期の台湾推理小説界において大きな影響力を持つ林佛児は、実は松本清張の大ファンである。このことについて、林氏自身は、『推理』169号（1998年11月）の「主編記事」（筆者注：編集長の話）に、

松本清張は江戸川乱歩以来、日本の最も偉大な社会派推理小説の先駆者である。また、彼は有名な歴史学者と考古学者でもある。彼は近代の日本文学、そして日本推理小説界の作家たちに大きな影響を与えていることは、疑いのない事実である⁽¹³⁾。

と松本清張を高く評価している。さらに、2008年に「一顆孤單又輝煌的寶石—推理

小説的必竟之路」という文章の中にも、

ここで松本清張について言及しなければならないのは、彼は私にだけでなく、台湾の推理小説界そのものに大きな影響を与えているからである。私は松本氏の人となりに感服し、学歴が低いにもかかわらず独学によって豊富な学識を持ち、文学の才能の優れていること、そして晩年の学問への執着と成果に傾倒する。松本氏は人生のすべての時期において、私からの称賛に値する成果を出している⁽¹⁴⁾。

と述べている。

そんな松本清張の作品の中にも、林佛児に一番影響を与えたのは、「ゼロの焦点」と言えるだろう。林佛児は、この作品から莫大な感動を受けたため、自分の出版社に推理小説を出版させる決心をしたのである。このことについて、林氏は、

1969年、私は初めて松本清張の作品『ゼロの焦点』の訳文を読んだ。私はすっかり夢中になり、絶えずに褒め称えた。その後、私は林白出版社を通して、松本清張の主な作品を約三十作翻訳出版し、台湾の読者に薦めた⁽¹⁵⁾。

と述べている。さらに、

私はこの作品（筆者注：「ゼロの焦点」）に影響されて、出版社を通して今まで五百冊以上の日本推理小説を出版させた。その結果、私の出版社は今まで台湾において一番多く日本推理小説を出版する出版社となった。私自身も、松本清張の社会派のお陰で、推理小説の創作に手を出すことになった⁽¹⁶⁾。

と述べた。

以上で分かるように、林佛児が推理小説を出版したのも、創作したのも、そしてその後推理小説を専門とする雑誌を作ったのも、最初のきっかけはすべて松本清張の「ゼロの焦点」である。

(三) 林佛児の推理小説

林佛児が松本清張から受けた影響は、彼が創作した推理小説の中にも反映される。

(4)

例えば、推理小説評論家の傅博は、

林佛児の推理小説には風俗派の特徴がある。風俗派とは、1957年以降に誕生した社会派の分流の一つだ⁽¹⁷⁾。

と述べている。この社会派とは、言うまでもなく、松本清張が道を拓いた推理小説のジャンルである。1957年とは、まさに松本清張が日本探偵作家クラブ賞を受賞し、『点と線』と『眼の壁』がベストセラーになり、清張ブームが日本で起こり始めた年である。

三、雑誌「推理」と松本清張

この章では、雑誌と松本清張の台湾受容の関連性について筆者がまとめたデータや資料を手がかりに分析を試みる。

林佛児は、松本清張に傾倒し、多大な影響を受け、出版社や雑誌を通して松本清張の作品を台湾人に紹介したが、林氏が松本清張と面識があるわけではない。この点について、林佛児自身は、

1985年頃、私は台湾の林白出版社の代表者として、日本の推理作家から作品の版權を取得するために、朱佩蘭さんと一緒に東京に赴いた。当時、契約を結ぶことに成功したのは仁木悦子、星新一、夏樹静子など数人の作家たち。これらの契約は、林白出版社がその作家のすべての作品を中国語版として出版できる形になっている。唯一商談が失敗したのが松本清張である。松本氏はマネージャーを通して、「契約するのは構わないが、作品ごとに契約しなければならない」と主張した。当時、台湾はまだ世界的な著作権組織に加入していなかったため、(外国の)作者本人と契約せずに翻訳出版しても台湾では違法にならない。もし新作ごとに契約する形を取ったら、中国語版を出版する前に海賊版が市場に出回ることになる。私はこの難点をマネージャーさんに伝えたが、最後まで了承を貰えなかった。また、憧れていた松本さん本人に会えなかったことが、最大の遺憾だった⁽¹⁸⁾。

と、述べている。林佛児がこのコメントを述べたのが2008年であり、松本清張はそ

の15年前の1992年に世を去ったので、林佛児は生涯一度も松本清張に会ったことがないことになる。また、林佛児が出版社を通して出版した松本清張の作品や、雑誌『推理』に掲載される松本清張の作品は、全部松本清張から了承を貰っていたわけではないことが分かる（台湾の著作権に関する法律が改定された後、特に後期の雑誌に連載される作品は、法律上著作権所有者から了承を貰わなければ掲載できないことが想定されるが、詳細は不明）。

次に、筆者がまとめた2つの表を先に提示しておく。まず、表1は、雑誌『推理』に掲載される松本清張の短編作品である。表2は、雑誌『推理』に掲載される、松本清張に関する記事や評論文である。

まず、表1で分かるように、雑誌『推理』に掲載された松本清張の作品は、延べ33作だが、その内、「潜在光景」、「典雅な姉弟」、「田舎医師」の3作はそれぞれ2回掲載されたので、正味は30作である。前期から中期頃までは殆ど朱俣蘭が訳者を担当したが、後期の訳者は史名に変わった。

ちなみに、筆者の統計によると、雑誌『推理』に掲載作品が多い日本人作家の順は、

- 一位、佐野洋、106作
- 二位、西村京太郎、103作
- 三位、夏樹静子、76作
- 四位、赤川次郎、63作
- 五位、森村誠一、54作

である。ここで気づいたのは、創刊者の林佛児が松本清張に傾倒している割には、30作は多いとは言えない数字である。それは何故だろうか。勿論、推理小説には風潮があり、雑誌に掲載される作品も時代によっては傾向が現れてくると思われる。しかし、背後にある原因は、それだけではないと筆者は思う。

資料の詳細は省くが、統計的に見ると、掲載作品の多い作家は、ほぼ初期から後期まで雑誌の常連である。例えば佐野洋は、253号から282号までの間に18作掲載され、1号から36号までの間にも5作は掲載される。しかし、松本清張の作品は、そうではない。創刊した最初の1年間は、確かにほぼ毎号掲載され、編集側の松本清張への情熱が分かる。しかし、その後露出度が極端に下がり、1986年の22号以降から、1991年の85号までの5年間は全く掲載されなくなる。そして、86号以降も掲載はなく、この状況は1992年、松本清張死去のために組まれた松本清張特集の96号まで続いた。その後も掲載される頻度が低く、100号から休刊号の282号まで

表1 「推理」に掲載される松本清張の作品

	作品名 (日本語)	中国語訳名	翻訳者	号	発表年月
1	指	手指	朱佩蘭	1	1984.11
2	愛と空白の共謀	愛情共謀	朱佩蘭	2	1984.12
3	失敗	腳印	朱佩蘭	3	1985.1
4	恐喝者	恐嚇者	朱佩蘭	4	1985.2
5	青春の彷徨	青春の徬徨	朱佩蘭	6	1985.4
6	年下の男	老小姐的悲哀	朱佩蘭	7	1985.5
7	危険な斜面	郎心狼心	朱佩蘭	8	1985.6
8	潜在光景	潜在意識	朱佩蘭	9	1985.7
9	田舎医師	郷下醫生	朱佩蘭	10	1985.8
10	すずらん	鈴蘭花	葉石澣	10	1985.8
11	絵はがきの少女	紅顏薄命	葉石澣	12	1985.10
12	典雅な姉弟	典雅的姊姊	朱佩蘭	14	1985.12
13	家紋	家徽	林清文	16	1986.2
14	遠くからの声	遙遠的呼喚	朱佩蘭	20	1986.6
15	百円硬貨	一枚硬幣	朱佩蘭	21	1986.7
16	凝視	凝視	朱佩蘭	22	1986.8
17	突風	外遇風波	林敏生	85	1991.11
18	捜査圏外の条件	捜査圈外的條件	陳見	86	1991.12
19	顔	臉	林敏生	96	1992.10
20	反射	反射	朱佩蘭	96	1992.10
21	殺意	殺意	詹龍驥	96	1992.10
22	女囚	女囚	楊慧芳	96	1992.10
23	不在宴会	沒有主客的宴會	朱佩蘭	116	1994.6
24	繁昌するメス	手術刀	朱佩蘭	144	1996.10
25	失踪の果て	失蹤的盡頭	朱佩蘭	150	1997.4
26	鉢植を買う女	買盆栽的女人	朱佩蘭	162	1998.4
27	文字のない初登攀	沒有記錄的初攀登	朱佩蘭	164	1998.6
28	潜在光景	潛意識	史名	227	2003.9
29	万葉翡翠	萬葉翡翠	史名	228	2003.10
30	典雅な姉弟	典雅的姊弟	史名	234	2004.4
31	田舎医師	鄉村醫生	史名	237	2004.7
32	薄化粧の男	施淡妝的男人	史名	238	2004.8
33	確証	證據	史名	238	2004.8

※227号の「潜在光景」、234号の「典雅な姉弟」、237号の「田舎医師」はそれぞれ9号、14号、10号に掲載されたが、訳者は違う。

の約 15 年間、掲載された松本清張の作品はたったの 11 作。しかし、表 2 を見ればわかるが、松本清張の作品が掲載されない時期でも、単行本作品の評論が時々掲載され、読者側や推理小説界全体が松本清張の作品に興味を失ったわけではないことが分かる。

林佛児ほど松本清張に傾倒している人物が、雑誌を創刊したわずか数年間で松本清張への情熱が冷めたとは考えられない。松本清張の作品を、雑誌『推理』が中期以降冷遇する理由は、他にあると思われる。その理由を、筆者は考えてみた。

まず考えられるのは、著作権の問題である。『推理』が創刊された 80 年代頃には、台湾の法律上、外国の作品を無断で雑誌に掲載したり、単行本として出版したりしても、違法にはならない。つまり、誰でも好き勝手に外国の作品を出版できる状況である。しかし、林佛児はそんな状況の中、他の出版社よりも早く著作権の重要性を感じていた。そして前述のとおり、林佛児は 1985 年頃、訳者の朱佩蘭を連れて、

表 2 『推理』に掲載される松本清張に関する記事や評論文

37号 (1987年11月):

松本清張の作品「蒼い描点」についての評論文「平凡人的不凡事——讀松本清張的《女作家的秘密》」(作者は陳見)、「又愛又恨的推理小說——我對《女作家的秘密》之看法與疑問」(作者は巫姿慧)

40号 (1988年2月):

「第九屆世界推理作家會議報告——松本清張汎論日本推理小說」(訳者は曾輝煌)

93号 (1992年7月):

「堅實的推理與厚利的諷刺——松本清張中、短篇傑作整理與推薦」(作者は黃鈞浩)

96号 (1992年10月):

松本清張の死去を弔うために特集が組まれ、「有感於松本清張之辭世」「松本清張花絮問答」「潮起潮落」「松本清張之我見」「由改編後的影視作品看松本清張」「蓋棺論定清張史・翻案談評松本書」⁽¹⁹⁾などの松本清張についての感想文や評論文が掲載される。また、松本清張の作品も「顔」「反射」「殺意」「女囚」と4作まとめて掲載される。

119号 (1994年9月):

「推理小説大家看」の一文には、松本清張の作品「犯罪の回送」「霧の旗」「点と線」についての評論が述べられる(作者は景翔)

169号 (1998年11月):

阿刀田高の「松本清張記念館巡礼」一文が掲載される(訳者は遊禮毅)

170号 (1998年12月):

花村萬月の「松本清張記念館」一文が掲載される

268号 (2007年2月):

松本清張の作品「天城越え」についての評論文「不只是推理而已——讀松本清張《天城山奇案》」が掲載される(作者は歐宗智)

277号 (2007年11月) — 282号 (2008年4月):

郷原宏の「松本清張とその時代」が連載される(282号以降休刊になったため、この連載は未完に終わった)

日本に赴き、作家たちと正式に契約することを図った。しかし、松本清張の作品に関しては、とうとう契約することには至らなかった⁽²⁰⁾。松本清張から正式な了承を貰えなかったため、その後松本清張の作品を雑誌に掲載することも、林佛児はできるだけ避けるように配慮したのではなからうか。これは、考えられる一つ目の理由である。

そして、二つ目の理由として、考えられるのは、雑誌の編集長の交代である。実は、雑誌『推理』が創刊された初期には、林佛児自身が編集長を務めたが、50号（1988年12月）辺りから、林佛児は台湾からカナダに移住したため、編集長の仕事を呂秋恵という人物に委ねた。林佛児自身も、1988年にカナダに帰化した後は、雑誌の経営は他人に任せていると述べている⁽²¹⁾。その約10年後の1998年、林佛児は再度『推理』の編集長の座に戻ったが、それまでの10年の間は、呂秋恵が雑誌の主導権を握っていたと言えるだろう。様々な場で松本清張への感服を公言する林佛児と引き換え、呂秋恵は松本清張の作品を特別に愛読するような発言はない。そのため、掲載作品に関しても松本清張の作品を舐屑するようなこともしなかったのではなからうか。これは、考えられる二つ目の理由である。

しかし、休刊号の約半年前、林佛児は雑誌『推理』に郷原宏の「松本清張とその時代」を連載し始めた。この連載は、毎回30ページ以上使われ、内容の大きな割合を占めていた。ここでも、林佛児が松本清張への情熱が感じられる。雑誌の休刊により、この連載が未完のまま強制的に中断されたことが、林佛児の心の中に一つの遺憾として残っているに違いない。

五、終わりに

以上、台湾の推理小説界に大きな影響力を発揮した林佛児と、その林氏が作った雑誌『推理』について説明し、そして、松本清張との関連性を統計資料などに基づいて解明することを試みた。林佛児が松本清張に傾倒する割には、約24年間雑誌『推理』に掲載される松本清張の作品は他の作家たちと比べたら多いとは言えないことが分かった。無論、松本清張には雑誌掲載に適する短編作品が少ないわけではない。松本清張の優秀な短編作品はいくらでもある。では、なぜ雑誌『推理』に松本清張の作品の掲載は多くないのか。そして、なぜ時期的に明らかに偏りがあるのか。本稿はいくつかの理由を推測してみた。雑誌『推理』はかつて台湾において一番重要な推理雑誌であり、また、松本清張は日本人推理作家の内、台湾の推理小説界の

草創期に大きな影響を与えた人物である。本稿はこの両者の関連性の研究に少しでも役に立てば、幸いである。

〔注〕

- (1) 『推理』が創刊される当時は、台湾にはもう一つ『偵探』という雑誌が発行されていた。しかし、『偵探』は1980年代後期には休刊になった。
- (2) 雑誌『推理』が主催した「林佛兒推理小説賞」は、余心樂、蒙永麗、思婷、藍霄、葉桑など、のちに台湾の推理小説界で活躍する多くの作家を生み出した。
- (3) 葉步月が1946年に発表した「白昼の殺人」が台湾人の最初の推理小説とされるが、この作品の使用言語は日本語であり、短編作品であるため、中国語で創作された台湾人の初めての長編推理小説は、約38年後の1984年、林佛兒が書いた「島嶼謀殺案」である。
- (4) 林佛兒「一顆孤單又輝煌的寶石——推理小說的必竟之路」（『鹽分地帶文學』19号、2008年12月）を参照。周浩正は文化人であり、当時は『中國時報』米州版の編集長を務めていた。
- (5) 詳しくは李彥樺「松本清張文学の台湾における伝播と受容」（『国文学』96号、2012年3月）を参照。
- (6) 林佛兒『芒果園』（中國詩友社、1961年）。
- (7) 林佛兒『南方的菓樹園』（皇冠出版社、1964年）。
- (8) 林佛兒『腳印』（林白出版社、1974年）。
- (9) 林佛兒『風箏與童年』（林白出版社、1977年）。
- (10) 林佛兒『北回歸線』（林白出版社、1980年）。
- (11) 林佛兒『島嶼謀殺案』（林白出版社、1984年）。
- (12) 林佛兒『美人捲珠簾』（林白出版社、1987年）。
- (13) 林佛兒「主編記事」（『推理』169号、1998年11月）。原文は「松本清張是繼江戸川亂歩之後、日本最偉大的社會派創始者的推理作家；他亦是著名的歷史與考古學家。他巨大的身影影響著近代的日本或文學或推理的作家們、不用置疑。」
- (14) 林佛兒「一顆孤單又輝煌的寶石——推理小說的必竟之路」（『鹽分地帶文學』19号、2008年12月）を参照。原文は「我會在此特別提到松本清張、因為他對我的影響很大、對台灣推理文壇亦然。我不只欽佩松本氏為人、或雖失學而能自修而學養豐富、也崇拜他的文學才氣、和到晚年他做學問的執著和成就。松本氏每個階段的每個成就都讓我佩服。」

- (15) 林佛兒「我的推理小說之路」(『文訊』270号、2008年4月)を参照。原文は「1969年、我在譯稿上第一次看松本清張的作品《焦點》、便陷入廢寢忘食地步。我自己沉迷、讚歎、而後並把松本清張重要作品近三十部、由林白出版社翻譯出版推薦給台灣讀者。」
- (16) 林佛兒「台灣的推理小說與「推理雜誌」」(『推理』219号、2003年1月)。原文は「就是這部作品影響我的出版社、出版了日本推理小說作品超過五百本、並成為至今台灣出版日本推理小說作品的最大家、以至於後來我染指推理小說的創作、都是拜松本清張社會派推理之賜。」
- (17) 傅博、林佛兒「推理小說在台灣——解嚴二十年後的推理小說發展」(『推理』281号、2008年3月)を参照。原文は「林佛兒的作品特徵是屬於風俗派、風俗派在日本、被視為一九五七年以後誕生的社會派之一支流。」この一文は、2007年10月13日、国家台湾文学館に行われた座談会の内容によるものである。
- (18) 林佛兒「一顆孤單又輝煌的寶石——推理小說的必竟之路」(『鹽分地帶文學』19号、2008年12月)を参照。原文は「一九八五年左右、我與朱佩蘭到東京、與日本推理作家簽中文出版權給在台灣的林白出版社、當時簽約成功者有仁木悅子、新星一和夏樹靜子等人。他們是把全部作品的中文版權交由林白出版社出版、唯獨松本清張透過他的經紀人表明、中文版權可以簽、但要出一本簽一本。由於當時台灣尚未加入世界版權組織、不簽約而出版也不犯法、如果松本氏有一本新作出版、等我簽約要出版時、盜版的恐怕早已上市。我把這個困難告訴經紀人、未獲同意。於是契約未簽成。我最大的遺憾、就是未能見到我心儀的松本清張先生。」
- (19) 作者はそれぞれ：「有感於松本清張之辭世」の作者は余心樂、「松本清張花絮問答」の作者は姿慧、「潮起潮落」の作者は陳銘清、「松本清張之我見」の作者は游禮毅、「由改編後的影視作品看松本清張」の作者は景翔、「蓋棺論定清張史・翻案談評松本書」の作者は黃鈞浩。
- (20) 同注18。
- (21) 傅博、林佛兒「推理小說在台灣——解嚴二十年後的推理小說發展」(『推理』281号、2008年3月)を参照。

(り) げんか／本学大学院生)